

(報告書)

愛煙家本居宣長の原点『おもひ草』の研究

助成研究者 田中 康二 (皇學館大学文学部・日本近世文学)

1. 研究目的

本居宣長は近世が生んだ最大の思想家の一人であり、中世歌学から近代国文学に橋渡しする偉大な国学者である。宣長の名を知っている者は多く、宣長の業績を知るものは少ない。宣長の業績を多くの日本人がよく知らないのは、幅の広い研究分野と生前に生み出した膨大な数の業績（出版物）に起因することは間違いない。申請者はそういった名のみ知られた宣長について、その偉大な業績と事跡を一般読者に向けて執筆した。

このように、申請者は本居宣長の実像とその業績を等身大に弘めるべく、近年さまざまな方面に力を注いできた。そういった経緯の中で、看過できないと考えるようになったのは、宣長の「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」の近代における受容である。この敷島の歌が広く、日本全国に流行したのは、実はタバコのお蔭である。明治三七年（1904）2月に、日本政府は日露戦争の戦費調達のために民間の煙草屋を接收し、煙草専売局として独占的にタバコを売り出す「煙草専売法」を国会で成立させ、7月1日より施行した。その際、タバコの銘柄として選ばれたのが「敷島・大和・朝日・山桜」の四種であった。専売局初のタバコによって、宣長は全国区になり、敷島の歌と共に広く知られるようになった。

この専売局初の四種の銘柄がいかなる経緯で選ばれたのか、詳細は不明と言わざるを得ないが、それを決めた事務官はおそらく宣長が極度のヘビースモーカーであることを知っていたに違いない。宣長は知る人ぞ知る愛煙家なのである。遠路はるばる来た弟子の前でタバコをふかしてあきれさせたという逸話があるくらいである。宣長はおそらく京都留学中の二十代の時にタバコをおぼえ、精神集中のために喫煙していたと考えられる。宣長には二十四歳の時に執筆した『おもひ草』という和文随筆があり、愛煙家宣長の面目がうかがえる。この和文随筆を研究課題としたい。

『おもひ草』は宝暦三年（1753）に執筆され、宣長没後に石出大春という人物によって蔵板（私家版）として刊行されたが、自筆本と版本との間には看過し得ない異同が存在する。そもそも、自筆本のタイトルは「尾花が本」であり、版本では「おもひ草」となっている。本課題研究では、流布本たる版本に依拠して、便宜上「おもひ草」と称することとする。また、段落分けにおいても、自筆本と版本とでは異なるところが存在する。さらに、字句における異同は枚挙に暇がない。そのため、実見できる限りの諸本を収集し、校合作業を経て、標準テキストを確定する必要がある。

次に、『おもひ草』は約三十の段落から構成されるが、各章段はタバコにまつわるさまざまなエピソードを散りばめており、その内容はそこで採用される文体と密接な関係がある。たとえば、四季のうつろいや恋愛を描く章段では古典和歌を踏まえた流麗な和文が採用されるが、卑俗な話題の章段では俗語をふんだんに用いた俗文体である。このような文体面・表現面からのアプローチは先行研究にはまったくなく、基礎的ではあるが斬新な研究と言える。是非、文体面・表現面から『おもひ草』を掘り下げて、愛煙家本居宣長の実像を明らかにしてみたい。

本研究を通して、宣長の愛煙家としての側面を浮彫りにし、思想家宣長を相対化する視座を得る。

2. 研究方法

愛煙家宣長には『おもひ草』という和文随筆があり、タバコに対する惜しめない愛があふれることばで綴られている。この和文随筆『おもひ草』について、その成立からそれが出版されるまでの経緯と、当該テキストの残存状況の調査と整理、さらには当該テキストの正確な読解と注釈作業という三本柱で研究を進めることを構想している。

まず、『おもひ草』の成立と出版の経緯については、本居宣長記念館所蔵の残存断簡資料により、執筆年次および月日の推定まで行けると確信している。また、これが宣長の死後ではあるが、出版されて全国の門弟たちの知るところとなったわけであるが、出版に持ち込んだのは誰か、どこの書肆から出版されたのか、どの程度刷られたのか、などについて、記念館の残存資料により明らかにしたいと考える。

次に、『おもひ草』の現存テキストの残存状況の調査をおこなう。写本と版本にわたる当該書は、古典籍総合目録データベースによれば、十九本が知られている。むろんそれら以外にも所在をつかんでいる諸本は数本ある。さらに、古書店を通して、入手可能なテキストも存在する。それらの流布状況を正確に把握することにより、当該テキストの享受の様相をおぼろげながらつかむことができる。さらに明快にテキストを捉えることも可能である。すなわち、それらには（特に写本には）少なからず文字の異同があると思われるので、紙焼き写真を注文したり、デジタルカメラで撮影したりして、じっくりと比較校合する必要がある。また、門弟や後人による書入が見られるものもあり、それは当該テキストがいかにかに読まれていたかの証左となる。

第三として、『おもひ草』を文学テキストとして読み解くことを実行する。当該テキストの冒頭には、たとえば次のような言説が存在する。「さるは、いひけたれても、なほ深くおもひいれて、燃ゆるけしきは、いぶきの山のさしも草に異ならず」という一文には、きわめて高度な和歌的技巧が用いられている。表面上の意味は、タバコは人から嫌われても（言ひ消たれても）、やはり思い入れは拭い去りがたく、燃える様子は伊吹山のモグサによく似ている、というのであるが、「言ひ消たれ」には「火消たれ」が隠され、「思ひ入れて」には「火入れて」が隠され、「けしきは、いぶきの」には「灰吹き」が隠されている。これらは隠題（かくしだい）と呼ばれる和歌の表現技法であり、しゃれた文学的趣向が用いられていると言えるのである。このような文章は速読すれば読み飛ばしてしまうが、精読と注釈をおこなうことによって、文学作品として扱うことが可能となる。何らかの事情により、この研究計画が頓挫しそうな場合、当該テキストの校本公開を再優先する。

以上、三つの観点から『おもひ草』へのアプローチを構想している。

3. 研究成果

如上の研究目的および研究方法にしたがって、研究計画を立てて導き出された成果および研究結果は、以下の三点に集約される。

(イ) 愛煙家としての本居宣長のプロフィールの調査

(ロ) 『おもひ草』の成立と諸本に関する仮説

(ハ) 『おもひ草』の文体的特徴の指摘

まず、(イ)は、本居宣長が実生活の中でタバコに親しむ場面や、宣長がタバコに関する蘊蓄について、宣長が著した随筆や宣長が博搜した漢籍類を紹介しつつ整理した。次に、(ロ)は、研究期間中に調査・収集した『おもひ草』の版本ならびに写本について整理し、その書誌・文献的観点から分析した。最後に(ハ)は、(ロ)を踏まえて『おもひ草』の文体的特徴を析出させるべく、おもに和歌をはじめとする古典文学作品からの摂取について考察した。

以上の三点について、(イ)を「研究成果」として記述し、(ロ)を「考察」として述べ、(ハ)を「結論」としてまとめとしたい。

国学者本居宣長が愛煙家であったことは知る人ぞ知る事実である。よく引用される場所であるが、門弟で熊本藩士の長瀬真幸による証言に触れるところから始めよう。

或年、長瀬真幸松阪ヲ辞シテ郷里熊本ニ帰ル。一日予ヲ訪ヒ、談遊学中ノコトニ及ブ。曰ク、宣長喫煙ヲ嗜ムコト甚シク、談笑ノ裡、常ニ烟管ヲ放タズ。タメニ室内濛々トシテ白烟満チ、コトニ粗葉ナレバニヤ、臭気甚シク、座ニ堪ヘズト。烟草ハモト本邦ノ産ニアラズ。然ルヲ、国学者ニシテコレヲ嗜ムハ、其ノ意ヲ得ザル所ナリ。

弟子と談笑する時にも煙管を手放さず、書齋鈴屋に白煙が充満して大変だったという話である。これは上田一道の手記より紹介された話であるが、その最後には国学者宣長が舶来のタバコを好むことに言及し、皮肉な視線を送っている。むろん、この結びは批判といったものではなく、単純に話のオチと考えるのが穏当であろう。ともあれ、愛煙家としての宣長のプロフィールを伝える逸話である。

宣長がいつからタバコを嗜むようになったのか詳らかにしないが、『おもひ草』を執筆した二十四歳の頃には愛煙家の風格があると言ってよい。『おもひ草』では、喫煙にまつわるさまざまなエピソードを紹介しているが、それらは書物からの知識や単なるまた聞きとして片付けるには生々しいリアリティがある。たとえば、外出先でタバコ入れを置き忘れて、それを童が届けてくれたという話(十)を記しているが、そのようなことは経験談としてしか語り得ないことであろう。奇妙なことに、『おもひ草』成立から三年の後、宝暦六年(1756)三月二十九日の「在京日記」に次のような記述がある。

廿九日、この月は小にて、一日はやく春もくれ侍る。過し比、祇園のあたりにて、たばこ入をおとし侍るが、いづこにてうしなひもしらねば、たづぬべきやうもなし。其まゝにて過ぬる、けふふしぎに、孟明のもとより、道にてひろひ侍るとてかへしをくられし。これほど世にかはりし事はなし。あまりのふしぎさに、ふと思ひよりて、返事にかきつけてやり侍るは

つれなくて春はくれ行けふしもあれうれしくかへるたばこいれかな

三年前に記した出来事が、まるでデジャヴのように繰り返された。紛失したタバコ入れが思いも掛けず見つかり、宣長の許に返ってきたのである。孟明とは山田孟明で、在京中に宣長の遊び仲間だった人物である。一緒に行動することが多かったから、行動パターンがよく似た孟明が拾得したことも理解できなくはないが、宣長が言うように不思議といえば、これほど不思議なことはない。おもわず一首詠んだ歌は、春は暮れ行くのにタバコ入れは返ってきたという

俳諧歌である。日記のはじめに記しているように、この日は暦の上で一日早い春の終日であったという。よくできた話である。なお、頭脳明晰にして、古典文学の読解については周到に準備と整理が行き届いた宣長であるが、日常生活においては案外このような迂闊なところが少なくなかったのかもしれない。門弟に慕われた宣長の面目はこのようなところからうかがうこともできるのである。

宣長は四十三歳の年、明和九年（1772）晩春に仲間とともに吉野方面に旅に出掛けた。古事記研究のための実地踏査（フィールドワーク）という意味合いもあったと言われるが、自らの出生の秘密に関わる水分神社への参詣のための旅でもあった。父母が水分神社に願を立てて宣長が誕生したという逸話がある。その旅の途上、吉水院に立ち寄って一服するのである（『菅笠日記』三月八日条）。

此寺の内に、さゞやかなる屋の、まへうちはれて、見わたしのけしきいとよきがあるに、
たち入て、煙ふきつゝ見いだせば、子守の御社の山、むかひに高く見やられて、其山にも、
かたへの谷などにも、ひまなく見ゆる桜共の、今は青葉がちなるぞ、かへすどくちをしき。

吉水院は後醍醐帝がしばらくいらしたところであり、そこから自らの誕生を招来した水分神社を眺めやる場面で、「煙ふきつゝ」見渡したというのである。現代の感覚で過去を裁断する過誤を犯してはならないが、あまりにも牧歌的な風景というほかはない。それほどまでにタバコは宣長にとって日常生活の一部だったのであり、肌身離さず連れ歩く相棒だったのであろう。

もちろん、宣長は生粋の学者なので、タバコを学問的に追究することに余念がない。とりわけ、自分の嗜好する物については、旺盛な好奇心と探究心が遺憾なく発揮された。京都遊学中（宝暦六年（1756）冬）に書き始められたとされる『本居宣長随筆』第五巻には、「烟艸 タバコ」と題して、次のような抜き書きが書き留められている。

○本艸洞詮曰、烟草一名相思草、言人食之則時々思想不能離也ト云ヘリ。四五十年先ニ朝鮮人ノ撰スル芝峯類記ト云モノニ曰、淡婆姑、草名、亦号南靈草、近歳始出倭国云々、或伝、南蛮国有女人淡婆姑者、患痰疾、積年服此中、得瘳、故名ト。此書朝鮮ニテ何人ノ作ト云事ヲシラズ。又清人陳淚子ガ花鏡一套東来シ、金絲烟、擔不帰等ノ名サマドクアリ。擔不帰モタバコノ唐音トミヘタリ。李白ガ詩ニ、相思如烟草、歴乱無冬春トイヘリ。相思草ト名ルハコレヨリ出ルニヤ。又偶符合スルカ。李ガ詩ハ本ヨリ烟ト草トノ事也。【摘文】

タバコの名義に関する蘊蓄を漢籍から引用することにより得ているわけである。言及される漢籍は四点、「本草洞詮」・「芝峯類記」・「花鏡」・「李白詩（送韓準、裴政、孔巢父還山）」である。まず、「本草洞詮」は、清の沈穆による著作で、順治辛丑（1649）の自序がある。当該箇所は巻九にある。次に、「芝峯類記」は、一般には「芝峯類説」と称される百科事典である。著者の李暉光（1563～1628）は李氏朝鮮中期の文臣、実学者である。当該箇所は巻十九にある。なお、後述する典拠では「芝峯類説」となっている。第三に、「花鏡」は「秘伝花鏡」六巻のことで、和刻本も製作された。最後の「李白詩（送韓準、裴政、孔巢父還山）」は、『全唐詩』巻一七五一一二に収録される五言古詩の一部で、二十四句からなる古詩の末尾の一对である。「如」を「若」に作る本文もあるが、意味に違いはない。煙草を「相思草」（おもひ草）と称するのは、この詩句を典拠とするとしている。

このように煙草に関する蘊蓄を引用している。ただし、これらの文章は原典から直接引用されたものではない。宣長自身が記しているように、これは伊藤東涯『秉燭譚』巻四より摘記されたものである。『秉燭譚』は享保十四年（1729）序であるが、奥付は「宝暦癸未七月新刻 京兆文泉堂発行」となっており、宝暦十三年（1763）の刊行であることがわかる。宣長がこの知識を得たのが写本によるものか、それとも版本によるものかで時期が相違する。『本居宣長随筆』第五巻「群書摘抄」において、『秉燭譚』の直前の書物が『武経七書』であり、この書は宝暦六年（1756）十一月頃に摘記されたことがわかっている（『在京日記』宝暦六年十一月十七日条）。『武経七書』を摘記した直後に写本『秉燭譚』を入手して記したとするのが順当であろう。『秉燭譚』の後には物茂卿『徂徠集』や太宰春台『独語』から写していることも、そのことを裏付ける。漢学者の随筆集を集中的に読んだのは京に滞在中のことと推定されるからである。したがって、宣長は京都留学中に写本『秉燭譚』を入手し、煙草に関する項目を摘記したと考えることができる。

以上のように、宣長は『おもひ草』を執筆してからも、煙草に関する知見をコンスタントに得ていたことがわかる。

4. 考察

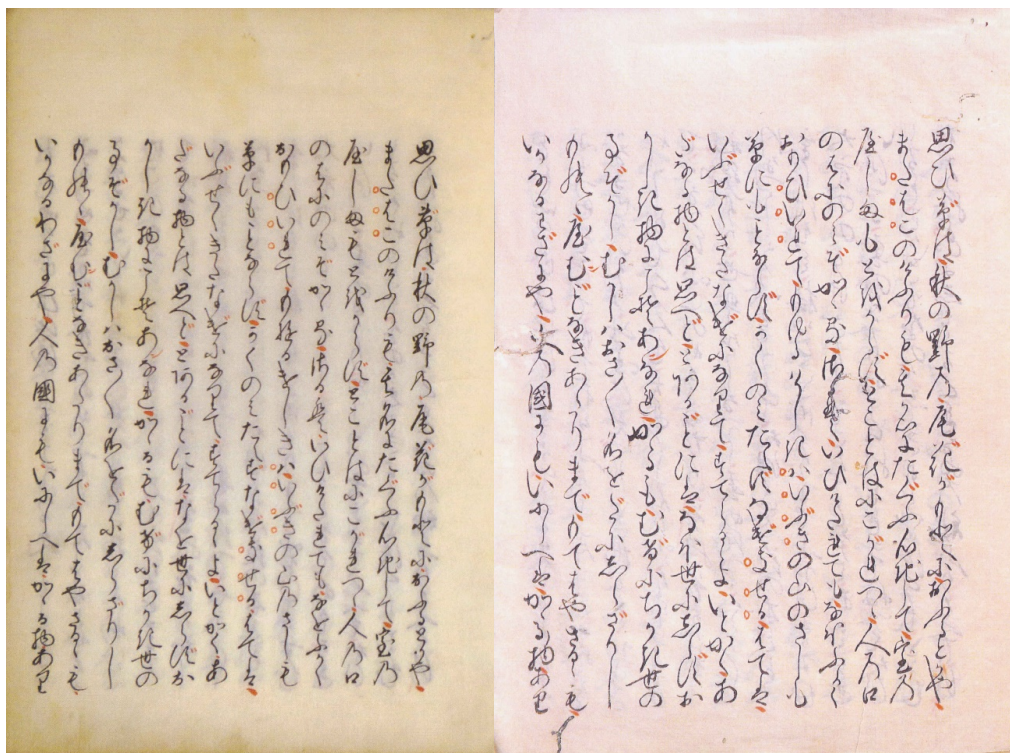
宣長が『おもひ草』を執筆したのは、写本の奥書に従えば、宝暦三年（1753）八月であることがわかる。当年二十四歳の宣長は、京都留学二年目の秋を迎えていた。九月には名を「健蔵」と改める。漢学の師堀景山に入門して一年半、いまだ医学修行にまでは至っていない時期である。だが、漢学とともに和歌・国学を景山から授けられ、独学で日本古典文学の扉を開くことになる。その間の日本古典への習熟度は、『おもひ草』の表現からうかがうことができる。

『おもひ草』の諸本は残存伝本により、大きく写本系と版本系の二系統に分類することができる。写本系は「尾花が本」の名を冠するものが多いが、「おもひ草」と題する写本もある。版本は内題「おもひくさ」により「おもひ草」と称する。

まずは、写本系から見て行くことにしたい。筑摩書房版『本居宣長全集』第十八巻（昭和四十八年（1973））が底本としたのは、本居大平旧蔵写本『尾花がもと』であり、東京大学本居文庫に現蔵されている。題簽に「鈴屋詩文稿 尾花がもと 合」とあり、墨付十三丁、片面十二行の本である。巻首には「此本ハ男左衛次カ筆跡ニテ、今ニテハコトニ珍重ノモノ也。御一覽或ハ御写シニても相済候ハハ、ほとなく御かへし可被下候、大平」とあり、末尾に「文化七年庚午年五月 清島写」の識語がある。また、本居宣長記念館蔵の写本は、墨付十四丁、片面九行で記され、裏表紙見返しに「この尾花が本著し給へるは宝暦三年癸酉中秋にして、翁廿四歳の御歳なり、このとし健蔵と改め給へり」と記された付箋が貼られ、さらにそこには本居清造が朱書で「コノ付箋ハ本居内遠ノ高弟堀内千稲ノ筆ナリ、思フニ此ノ書ハ同氏ノ旧蔵ナルベシ、（花押）」と付箋を貼付している。

本居宣長記念館蔵本が堀内千稲旧蔵にかかることを鑑み、皇學館大学附属図書館五葉蔭文庫を調査したところ、案の定、『尾花が本』（題名は外題による、内題なし）が所蔵されていることが明らかになった。墨付十三丁、片面十二行の写本である。巻末には本居宣長記念館蔵本と同じく、宣長の年齢と改名の件が付箋に朱書されている。したがって、本居宣長記念館蔵本の

祖本に当たる可能性が高いことが推察される。しかも、五葉蔭文庫本には「乙未仲春 長谷川常雄」なる書写奥書が存在するのである。語釈にも記すように、同年（安永四年（1775））は常雄が十九歳の年である。すでに十六歳の年には『菅笠日記』の旅に同行し、後に宣長から「格別出精厚志」（寛政五年（1793））と期待されることになるわけであるから、早い時期に宣長の習作を借り出し、写本を造っていたとしても不思議ではない。これがいかなる経緯からか堀内家に渡り、再写されて本居家（清造）のもとに戻ってきた経緯を勘案すれば、奇縁というべきかもしれない。



岩田隆氏旧蔵本（本居宣長記念館）

五葉蔭文庫本（皇學館大学附属図書館）

奇縁といえば、もう一つ本書の写本が本居宣長記念館に現蔵されていることに言及しておく必要がある。やはり「尾花が本」の名を外題に有する一本であるが、子細に検討すれば、この本は墨付十三丁、片面十二行という書写の大枠は言うに及ばず、仮名字母から文字配りに至るまで、五葉蔭文庫本にきわめて近い性格を有する本であることがわかる。時に「折」の仮名について、五葉蔭文庫本は「をり」とするのに対して、本居宣長記念館本は「おり」とするなど、仮名遣いに関する相異点がごくたまに見られるが、その点を別にすれば、模本である可能性が高い。しかも、本居宣長記念館本が祖本で、五葉蔭文庫本が子本であると推定される。宣長と宣長門弟長谷川常雄系の本、ならびに宣長の孫内遠の門弟が堀内千稲であるという点において、現所蔵はきわめて順当な関係ということになるだろう。ところが、この本居宣長記念館本はもともと岩田隆氏の旧蔵にかかり、氏の『本居宣長の生涯』（以文社、平成十一年（1999）二月）刊行

の記念として同館に寄贈された一本であるという（末尾に挿まれた付箋の記述に拠る）。岩田隆氏が当該本を入手された経緯は詳らかにしないが、宣長没後二百年（平成十三年（2001））を前に、収まるべきところに収まったと言ってよかろう。奇遇と言ってよい。

先に岩田隆氏旧蔵本を祖本、五葉蔭文庫本を子本としたが、宣長と長谷川常雄（当時は中里常雄）との関係に鑑みれば、常雄が宣長の著作に関して一文字も忽せにするまいとする書写態度等からも矛盾しないと考えることができる。とすれば、必然的に岩田隆氏旧蔵本は宣長自筆本の可能性が高いということになる。実際、本居宣長記念館では自筆本として取り扱われている由である。なお、自筆本の認定に関しては、筆跡鑑定やさらなる書誌調査、本文調査ならびに伝来等に関する総合的研究を経た上で結論づけられるべきものとする。なお、大久保正氏によれば、「本書の自筆稿本は「おもひぐさ」と題し、本居家に伝えられたという記録はあるが、現在その所在が明らかでない」（『本居宣長全集』第十八巻「解題」）由である。

本稿では書写年次が明らかで、かつもっとも古い五葉蔭文庫本を底本とすることとした。なお、前掲のほか、写本として伝わるもので、実見できた（複写を含む）ものに次の本がある。

- (一) 天理大学附属天理図書館蔵「をはなかもと」（佐佐木信綱写）
- (二) 大阪府立中之島図書館石崎文庫蔵「尾花がもと」（浅井清長写）
- (三) 茨城大学図書館菅文庫蔵「をはなかもと」（文化九年十二月三日伊能千俣写）
- (四) 刈谷図書館蔵「をはなかもと」
- (五) 刈谷図書館蔵「をはなかもと」
- (六) 西尾市岩瀬文庫蔵「おもひぐさ」（版本の臨写本、文政六年夏写）
- (七) 京都大学文学部国文学研究室蔵「おもひぐさ」(文政十二年十二月五日長瀬真幸写)
- (八) 静嘉堂文庫蔵「おもひぐさ」（版本の臨写本）
- (九) 京都府立総合資料館蔵「おもひぐさ」

さて、版本として流布した『おもひ草』に話を移そう。『おもひ草』は宣長の没後、石出大春によって刊行されたものであるが、石出大春なる人物について詳らかになっていない。題簽には「おもひぐさ 全」とあり、序題は掲出のように「をばながもと」、内題は「おもひぐさ」である。序は八行どりで二丁、本文は九行どりで十七丁である。末尾に「樗屋蔵刻」とあるが、石出大春と同様「樗屋」についても未詳である。石出大春の序文を以下に掲げることにした。

乎波那賀毛登迺波之布美

靈^{久毛}座神^{可母}奇^{久毛}座神^{可母}真草生野椎神^乃御魂幸^{波比爾}幸^{波比}給^{比天}山^乃曾岐野^乃衣寸^{末伝}千種八千種^乃
種々產生給^{開流}麻爾麻爾重詛遠異国在奇草^{左開}朝風^爾千重浪立夕風^爾五十重浪立奥浪辺浪志努
岐^氏皇国^{爾叙}參来^留其中^爾煙草^云草^乃瑞葉弥榮^{爾榮}而此草^乃不生出土不入立地^乃在^{邪流}金絲烟^{那母}烏玉^乃
間開^{米流}從^母久賢^乃夜^乃深更^{加岐理}立不立家^{可毛}無^{加流倍伎}薰風^{波母}山彦^乃將応極谷潜^乃狹渡極悉^爾充滿^理於
是伊勢人本居宣長思草思^{比忘}礼受伝乎波那賀毛登^乃一種^乎植添^{豆那理}其言葉^乃句^比弥益^爾薰^{礼々}是^{遠之毛}
相思草誰^{之母}相思^{邪留倍岐}雖然此草植添^之從^母歲^波二十余年^乎經^{爾多}旧之詞草^種奈良^{邪流}醜^乃異草生添
而頓^爾見別^{賀氏那理}己旧章^乃荒玉^乃月^爾日^爾枯往^{努倍幾乎}憂^{波之美豆}朱引旦^爾耘夕星^乃夕^爾培^氏繁^久氣支^久異草^乃
化草搔^{比多}礼婆^{清々}之^久曾那^{礼那流}山下風^乃甚寒^{氣久}鍾^乃礼雨^乃弥敷^爾零^{止母}許登^乃葉末之乱相^{倍伎}可母故擊
壤^而歌^{比氣良久}人皆之執而偲婆世思草露珠貫言葉叙許礼

序文の題は「をばながもとのほしぶみ」と読む。外題も内題も「おもひぐさ」であるにもかか

ならず、序題が「尾花が本」であるのは不審ではあるけれども、ここでは深入りしない。文体は一貫して宣命書であって、体言（名詞）や用言（動詞等）は大きく、助詞や助動詞、活用語尾は小さく万葉仮名で記す体である。宝暦三年の時点において、宣長は宣命体をはじめとする古代文体に関心があったとは思えないので、少し違和感があるけれども、この文体を採用したところに序者の思いを知ることができる。『古事記伝』をはじめとする上代文学研究者としての宣長へのオマージュであろう。そうであるとすれば、序文中の「此ノ草植エ添ヘシ従モ歳ハ二十余年ヲ経ニタレバ」という言説も別の解釈の可能性が浮上する。「此ノ草植エ添ヘシ」は、本書が執筆された宝暦三年（1753）を指すと考えることもできるが、そこから「二十余年」経過しても、まだ安永年間であり、古代文学研究者としての本領はあまり知られていない。とすれば、その始発を『古事記伝』初帙五冊が刊行された寛政二年（1790）あたりを上限とするのが妥当ではないだろうか。または、版本の臨写本の書写奥書の上限が文政六年（1823）であることを斟酌すれば、宣長の没年（享和元年（1801））というのも設定可能であろう。少し苦しい解釈ではあるが、本書が宣長没後に刊行されたとする通説と、序文が宣命体で記されているという事実を勘案すれば、そのあたりに落ち着くことになるのではなかろうか。

この版本『おもひ草』は近世後期に一定程度、流布したと想定される。そして、近代以降は版本を底本として、以下の叢書に収録されて広く読まれるようになった。

（一）『百家説林』巻三（明治二十六年（1893）、吉川半七）・正編上

（二）『本居宣長全集』巻五（明治三十五年（1902）十月、吉川半七、片野東四郎）・増補版巻九

（三）『随筆日記抄』下巻（大正十二年（1923）十二月、裳華房）、鴻巣盛広による略注あり。

（四）『日本随筆大成』巻六（昭和二年（1927）九月、吉川弘文館）

（五）『たばこ古文献第二集』（昭和四十二年（1967）三月、日本専売公社）、清水国光による口語訳あり。

とりわけ早い時期に『百家説林』に収録されたために、宣長の愛煙家としての側面が知られるようになった。その後、宣長のタバコ好きが広く知られるようになり、大蔵省専売局による日本最初の口付タバコが発売された折（明治三十七年（1904）七月一日）、敷島・大和・朝日・山桜の四種が選ばれたが、その命名は次の宣長の歌に拠っている。

敷島の和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花

この歌は宣長が還暦の年（寛政二年（1790））の秋に自画像に添えた賛として詠まれた歌である。この四種の銘柄によって、宣長の歌は広く知られるようになったが、その一方で宣長のタバコ愛好もまた知られるようになったのである。

5. 結論

『おもひ草』は宣長の嗜好品に対する偏愛と、それを雅俗の事柄を縦横に書き分ける表現力により、近代に入ってから随筆集等に収められ、一定の読者を獲得したものと思われる。当該書の評価として、たとえば、大久保正は『本居宣長全集』の解題にて、次のようにその特徴を指摘しているものが標準的なものであろう。

本書は、宣長が煙草と喫煙にまつわる四季折々の情景や趣味を、平安朝好みの美しい雅文で

書き綴ったものであるが、その煙草好きと共に、当時二十四歳の宣長が、その嗜む煙草に寄せてかかる雅文の創作を試みるまでに、平安朝の文章のスタイルを自家薬籠中のものとなし得ていたことは、宝暦十三年（一七六三）、三十四歳の頃の作とされる『手枕』等の文章の先駆をなすものとして注目に値する。

二十四歳の習作であること、平安朝の雅文体で綴ったものであること、雅文小説『手枕』に先行することなどである。たとえば、次の文を見てみよう。

ふみ分てこし跡だになき、庭の荻はら、ことゝふものは風のみにて、いとゞ、身にしみつゝ、色みえぬ人の心は、木の葉と共にうつろひゆく、秋の夕暮、いまさら、まつとはなき物から、うちしをれたる浅茅が末の、露のそこより、心ぼそう鳴いでたるまつ虫も、誰をかと思へば、人わろくなみだのこぼるゝも、つゝましくて、まぎるゝかたもやと、手ずさみのやうに、かいつぐ手つき、いとなよゝかにて、打みじろくさまも、らうたしや。

この長い一文の中には、次のような和歌が踏まえられ、あるいは想起しつつ読むことを期待して記されている。

(一) 形見とてほの踏み分けし跡もなし来しは昔の庭の荻原（新古今集・恋四・一二八九・藤原保季）

(二) ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは風よりほかにとふ人もなし（古今集・秋上・二〇五・読人不知）

(三) 風の音の身にしむばかり聞ゆるはわが身に秋や近くなるらむ（後拾遺集・恋二・七〇八・読人不知）

(四) 色みえでうつろふものは世の中の人心の花にぞありける（古今集・恋五・七九七・小野小町）

(五) 秋風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかたとぞ思ふ（古今集・恋四・七一四・素性）。

(六) 君待つとわが恋ひをればわが宿のすだれ動かし秋の風吹く（万葉集・巻四・四八八・額田王）

(七) 跡もなき庭の浅茅に結ほほれ露の底なる松虫の声（新古今集・秋下・四七四・式子内親王）。

(八) もみぢ葉の散りてつもれるわが宿に誰をまつ虫こころ鳴くらむ（古今集・秋上・二〇三・読人不知）。

かくも多くの和歌を背景に置いて解釈することを強いる文体であると言ってよい。逆に言えば、この一文は古典和歌から紡ぎ出された文章表現なのである。これぞまさに雅文学の極致と言ってよかろう。このような文章は王朝物語や平安朝和歌の教養を背景にして執筆された和文であって、同じ知識基盤を有する者の中で共有された文体ということが出来る。国学を修め、和歌を詠み、時には和文を綴ることを好む国学者の間で流通する文章である。

こういった和文を『おもひ草』の特徴とし、そこから宣長の国学者歌人としての實力を見るのは有意義な観点と言えよう。古代文化を解明することを生涯の志としつつも、源氏物語をはじめとする王朝文学の世界に終生、沈潜した宣長にとって、平安朝和文を用いて作文することは理想の実現への近道でもあったからである。このような王朝物語的教養は確実に宣長の学問的性質を雄弁に物語っていると言ってよかろう。むろん、それはおおむね妥当な評価であると

思われるけれども、子細に検討すれば少し修正が必要と思われる箇所もないわけではない。それは当該随筆が「平安朝好みの美しい雅文」（大久保正）一辺倒ではないということである。たとえば、次の文を見てみよう。

かりそめに物したるまらうども、すべてとりあへず、まづいだすものなるを、すかぬは、やうなしとてかへしたる、はへなき物なり。

文意は次の通り。ついちょっとやって来た客人にも、総じてタバコは最初に供するものであるけれども、タバコが嫌いな人は要らないと言って突き返してしまうのは、見栄えが悪いものだ、といったところだろう。この文のどこが問題なのか。これは古典語の語彙を用い、正確に古典文法を操りつつ綴った作文ではあるが、いわゆる古典文学のテキストからの引用がまったくないということである。特定の作品を連想させるフレーズもなければ、下敷きにした作品のシーンもない。なぜかといえば、この場面自体が俗だからである。つまり、近世における日常を古典の語彙と文法で表現した文章なのである。そのようなシチュエーションはかつて古典文学に表現されたことがなかった。踏まえるべき古典文学作品が見当たらないのである。

いま並べた両者の文体を比較すれば、問題の所在は明らかであろう。平安朝の語彙と文法を駆使し、主に平安朝の古典文学を踏まえて綴られた雅文学もさることながら、俗の場面や議論をも雅文体で表現することを達成したところに、『おもひ草』の文体実験の意味があったと思われるのである。すなわち、あらゆる事象を古典語と古典文法で表現することが可能であるということを証明したわけである。このことは和文によって表現する文体が誕生したことを意味する。諸先達が指摘するように、『おもひ草』が『手枕』の先蹤であるとする面ももちろんある。賀茂真淵から薫陶を受けたように、古代文学を理解するためには、古代語で作文する技能を身につけなければ本物とはいえない。そのためには、古代文学を模倣することから始める必要がある。『手枕』は源氏物語をより深く理解するための試みであった。しかし、それだけではない。古代にはなかった事柄を古代語で表現することも、国学にとって重要な役割だったのである。そういった意味で、後に宣長が行う注釈、俗をも写す随筆、議論を事とする論述など、あらゆる文体の可能性がここに拓かれたということが、『おもひ草』の意義であると考えられる。

6. 引用文献

- 『百家説林』巻3、吉川半七、1891
- 『本居宣長全集』5巻、吉川半七、片野東四郎、1903
- 『本居宣長稿本全集』1輯、博文館、1922
- 『随筆日記抄』下巻、裳華房、1923
- 『日本随筆大成』巻6、吉川弘文館、1927
- 『たばこ古文献第二集』、日本専売公社、1967
- 『本居宣長全集』18巻、筑摩書房、1973
- 『本居宣長全集』、16巻、筑摩書房、1974
- 『日本随筆大成』1期11巻、吉川弘文館、1975
- 岩田隆、『本居宣長の生涯』、以文社、1999
- 杉田昌彦、『宣長の源氏学』、新典社、2011

- 田中康二、『村田春海の研究』、汲古書院、2000
田中康二、『本居宣長の思考法』、ペリかん社、2005
田中康二、『本居宣長の大東亜戦争』、ペリかん社、2009
田中康二、『国学史再考一のぞきからくり本居宣長』、新典社、2012
田中康二、『本居宣長—文学と思想の巨人』、中央公論新社、2014
田中康二、『本居宣長の国文学』、ペリかん社、2015
田中康二、『真淵と宣長—「松坂の一夜」の虚像と実像』、中央公論新社、2017

7. 英文アブストラクト

Research on Motoori Norinaga's *Omoigusa*

Koji TANAKA

(Faculty of letters , Kogakkan University)

This study on *Omoigusa* presents the results of an investigation of extant sources, and through textual criticism and revisions of the content, it aims to provide annotations to the text. First, the results of an investigation of each version has shown that, as a rule, manuscripts carried the title of *Obanagamoto* and printed versions were titled as *Omoigusa*. Second, the content of the original text has been found to have been best retained in the manuscript versions, and this essay has concluded that it is therefore appropriate to treat the *Obanagamoto* text held at Kogakkan University in the Horiuchi Collection as a source text. Third, the process of annotating this text has revealed that Norinaga had already acquired in his 20s most of his skill with written Japanese expressions from purely Japanese passages, and this paper establishes that he was able to freely use this skill to compose various kinds of sentences. In describing scenes or depicting emotion, he drew on the literary classics such as the *Kokin wakashu* [Collected poems of ancient and contemporary times] or the *Genji monogatari* [Tale of Genji], and while the text was written in the classical style of elegant ancient Japanese literature, when depicting the tobacco itself, he described it using colloquial expressions from the early modern period.